ザンビアの学校で授業観察

-グローバル人材育成プログラムを通して-

Lesson Observation in a School of Zambia:

Through the Global Leadership Training Program

特定非営利活動法人 IMAGINUS 事務局長　**中里　春菜**

NAKAZATO Haruna

(Secretary General, NPO IMAGINUS)

キーワード：ザンビア、人材育成、海外留学

はじめに

私は、2 つのプログラムを用いてサブサハラアフリカの一国であるザンビアの学校に入った。一つは国連大学の実施する Global Leadership Training Program（GLTP）である。2013 年度に第 1 回目の募集があり、1 期生として参加させてもらった。これは大変ユニークなプログラムで、派遣先の大学の教員が指導教官として現地で派遣学生の研究指導をしてくれるというものである。これと並行して、独立行政法人国際協力機構（JICA）のインターンシッププログラムに応募した。2013 年、GLTP と時を同じくしてザンビアでの教育プロジェクトの評価活動に関わるインターンの募集が出ていた。私は、修士課程からザンビアの理科教育を自分の研究対象としていたため、正に研究対象に合致した内容であった。そこで、上記 2 つのプログラムを通してザンビアで調査を実施することとなった。

ザンビアでの生活

私が GLTP でザンビアに行ったのは 2014 年 1 月から 3 月の期間で、ちょうど広島大学大学院の国際協力研究科で博士課程 2 年目の時であった。ザンビアに行ったのはこれが 3 回目であった。既に現地に知り合いもいたことから、現地での暮らしについてはあまり不安は無かった。ホテルは自分で探して手配し、移動も自力で行った。驚いたのは、その前の年に行ったときよりも物価が倍近く上がっており思った以上にお金がかかったことだ。手持ちのお金がギリギリだったのでクレジットカードが使用できるお店で生活用品を購入するようにしてなんとか乗り切った。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

現地到着後1週目で行ったのは、ザンビア大学の指導教官に挨拶をしに行くこと、研究計画を相談すること、大学の図書館を使用できるように許可証を発行してもらうこと、教育省に調査許可のレターを発行してもらうこと、JICA事務所への挨拶やインターンシップの活動概要説明を聞くことであった。JICAのインターンシップ内容はインターン生それぞれのやり方でプログラム評価を行うというものであった[1]。活動エリアを指定し、活動先でのカウンターパートを割り当ててくれるが、それ以外は基本的にインターン生に任された。つまり自由に活動内容を立てることが出来た。

写真 1：訪問した学校の一つ

1週間後、私の活動エリアである北西部州のソルウェジ郡に移動した。首都のルサカからバスで12時間の距離である。到着後は基本的に関係者への挨拶回りをし、カウンターパートに現地の情報を教えてもらい、その地域のほぼ全ての学校を訪問し挨拶をして連絡先を交換した（写真1）。この都市は初めての地であったため週末は町を散策し生活圏を探索した。

写真 2：協議会の様子

ザンビア到着後3週目にしてようやく調査活動を開始した。私の調査目的は授業研究[2]の協議会で教師がどのような学びを得ているかを質的に明らかにすることであった。学校を訪問し、授業研究の各活動を観察するというのが調査手法である（写真2）。授業研究は毎日ある訳ではないため、授業研究のない日は通常の授業を観察したり、教師にインタビューをしたり、必要な資料収集をしたりした。

ちょうど1ヵ月後に1度首都に戻り、指導教官に調査の進捗状況を伝え今後の方向性を相談した。またJICAの専門家に方々にも中間報告を行った。再び活動地に戻り、調査活動を1ヵ月続け、帰国前には、訪問した学校全てに調査結果を報告し、州教育省でも報告会を開かせてもらった（写真3）。首都ルサカではザンビア大学の指導教官とJICA専門家、教育省関係者に向けて調査結果を報告した。

[1] ザンビアでは教師の能力向上を目指して校内研修で授業研究を行うというプロジェクトを実施していた。
[2] 授業研究とは教師が集団で、①授業計画を立て、②授業を実施し、③授業の振返りを協議するのを基本サイクルとした教師の学びの場のこと。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

写真 3：教育省での調査報告の様子

現地で調査するための工夫

ビデオカメラを持った日本人が自分のクラスに入ってきて授業を観察されるのは大変緊張することであろう。私はまず自分と先生の距離を近づけるため、最初はビデオカメラは持たず、観察だけさせてもらった。観察させてもらった後は上手くいったところや上手くいかなかったところなどをざっくばらんに話をした。また、毎日朝 7 時から学校に行き、出来る限りの時間を職員室で過ごした。調査に関する話だけでなく日常の会話や冗談など交わすことで教師との関係を近づけるよう工夫した。

また、私ばかりが授業を観察していては不公平と思い、私自身も授業を行い、先生たちに見てもらってコメントをしてもらった（写真 4･5）。

写真 4:私の授業を受ける生徒

写真 5:私が授業している様子

写真 6:仲良くなった先生たち

プログラムを通しての学び

現地での暮らしを経験し、シンプルな暮らしに魅了された。停電の中でロウソクの暮らし、炭に火をおこしての料理（写真 7）、手での洗濯、昼下がりには木の下で団欒。学びといえば、もちろん現地の料理（写真 8）や言葉、「お互い様」文化 [3]など、これまでの価値観をリセットするいい機会となっ

[3] なんでも頼みごとをしてくるが、こちらが頼んだときは快く受けてくれる。相手に迷惑をかけないという発想ではなく、頼み事はお互いにし合うという文化があると感じた。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

た。

GLTP のプログラムを通して得た気づきは、特に大学との連携に関して言えば、現地の大学の図書館でしか手に入れることのできない情報が沢山あったということと、指導教官との密なコミュニケーションが重要であるということである。私の場合、指導教官とは計画共有、中間報告、最終報告の 3 回の面談であったが、基本的に指導教官は全て受け入れて応援してくれる姿勢であった。この態度には大変励まされたが、研究者としてはもう少し批判的に指摘をしてもらいたかったという思いもある。もっと日常的に連絡をしていれば指導教官との距離も縮めることが出来たかもしれない。

JICA のインターンシップを通しての気づきは、特に授業研究のプロジェクト評価に関して言えば、私の調査結果に対する教師や教育省の方の反応から、現地の人にとっても興味のある内容であったということを知った。そして、教育改善のためのプロジェクトといっても教師にしてみれば本音と建前があるということが分かった。先述の通り、今回は出来るだけ教師が私に本音で話せる環境をつくるよう、工夫をした。その結果、教育プロジェクトに対する教師の本音を聞くことが出来たと思う。例えば、「授業研究はいいプログラムだと思うけどデモ授業の授業者になるのは嫌だ」や「教師の学びに繋がっているかどうかは分からないが、報告する必要があるから実施する」というような、必ずしも好意的でない意見である。一方で大変積極的に取り組んでいる教師らもいて、同じグループ内でのモチベーションに差があった。

写真 7：炭に火をおこして料理

写真 8：巨大きのこ。料理方法を教わった。

プログラム後の活動と今

ザンビアからの帰国後、調査結果は国連大学と JICA にて発表した。その後、アフリカ教育研究学会と日本理科教育学会、アメリカで開催された国際学会 Comparative and International Education Society にて発表し、今後、国際協力研究誌に掲載される。派遣での 1 番の収穫が調査データであることは間違いないが、上述した現地生活での学びはその後の私に大きな影響を与えた。

ザンビア滞在を通して、今の日本の暮らしは大事なものを見失っていると強く感じた。発展途上国と先進国という言葉で区分けをすると、まるで発展途上国が先進国に教えを請うべき存在であるような構図が想像される。しかし、直の人付き合いが減った先進国の日本において、発展途上国のザンビ

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

アから人との付き合い方を学ぶことができる。時間に正確な先進国の日本において、発展途上国から時間よりも大切にすべきものがあることを知ることが出来る。

私は、2013 年、大学生の学びの場作りをする NPO を仲間と一緒に立ち上げた。現在はこの NPO 法人 IMAGINUS の事務局長を務めている。この NPO が実施する、これからの日本を担っていく大学生を対象とした学びのプログラムのひとつに、インドでのワークキャンプというものがある。このワークキャンプは、私が今回 2 つのプログラムを通して経験させてもらったザンビアでの生活、現地の人との付き合い方、大学との連携（学術交流）の中で得たヒントを具現化したものとなっている。

生活に関しては、異文化に入ることで新しい生活様式や習慣を学ぶが、同時に自国の生活様式や習慣を見直すことになる。これまで当たりまえだと思っていたことを再検討することで自分なりの新しい価値観が生まれる。このワークキャンプは、インドに 2 週間滞在する内容となっており、そこでは観光地をまわるといったものではなく、現地の人々の生活に密着することに重点を置くものとした。

人との付き合いに関しては、現地の人たちのコミュニケーションの取り方から学んだものが自分たちの実践に生かされる必要がある。このプログラムでは数名でチームを組み、3 ヵ月かけて自分たちの追求したいインドの社会課題について議論を重ねる。インドに行くまでの 3 ヵ月を通してチームメンバーとのコミュニケーション力を高めていく必要がある。帰国後は 1～2 ヵ月かけて学びをまとめるためにチームでのミーティングが繰り返される。

そして、大学との連携という点に関しては、同世代の学生同士の連携、そしてフィールド調査という形で具現化した。現地の高校生から大学生たちと日本の大学生たちが、一緒に特定の社会課題について議論する学生会議を開催した。また、別のときには、自分たちの設定した仮説をフィールド調査することで現実をより深く理解するような内容を組み込んだこともあった。調査の際にはどのようにして現場に近づくかが鍵であるが、参加者はそれぞれ工夫しながら自分たちのやり方で対象との距離を縮める。帰国後は報告会を実施して完了する。中には調査内容を学会発表した参加者もいた。

私自身、このプログラムには大変やりがいを感じているし、参加者はこれからの日本に欠かせない人材になっていくと思う。GLTP からは、相手国を対等な存在として互恵関係の連携を取っていくプログラムの組み方を参考にさせてもらった。JICA インターンの活動からは現地の人と距離を近づける工夫をする点を組み込んだ。私は、これからの日本を担っていく存在として自分自身も力を発揮していきたいと思っているが、同時に大学生の学び作りであるこの活動には大変大きな意義を感じている。今後も更に発展させたいと思っている。

NPO 法人 IMAGINUS のロゴは地球をモチーフとした天道虫であるが、通常の天道虫の色である赤と黒ではなく青と緑を用いることで既定観念や価値観を覆すことを込めている。更にその名の通りお天道様に向かって飛び立つ天道虫を用いることで、私たちも明るい未来に向かっていきたいという願いを込めたロゴである（図 1）。何をもってグローバル人材と呼ぶかは様々な定義が存在するが、私は、

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

既定観念に捉われず、人々が共生できる社会を目指すことの出来る人材であると考える。これからもそういった人材育成の場作りを続けていきたいし、私自身も参加者との関わりの中で学んでいきたいと思っている。

写真9:2016年春の参加学生

図1：NPO法人IMAGINUSのロゴ

さいごに

2014年に私がザンビアに行くことができたのは何より､経済的かつ大学連携支援をしてくれたGLTPのおかげである｡そして円滑な調査活動が出来たのはJICAインターンシッププログラムのおかげである。更に、この両プログラムのサポートによって、調査計画から実施、分析まで様々な方から助言を頂くことができた。異文化において自力で工夫しながら生活するということは想像以上の学びが待っている。学生というポジションはこれに挑戦する絶好のタイミングだと思う。今後、多くの学生が積極的に挑戦していくことを願う。

＊　本記事については、本マガジン『留学交流』2016年1月号にも下記の関連記事が掲載されていますので、ご参照ください。

【論考】

「アフリカにおけるグローバル人材育成事業」-国連大学による能力開発へのアプローチ-

国連大学サステイナビリティ高等研究所プログラム・アソシエイト　今井　夏子

http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/__icsFiles/afieldfile/2016/01/12/201601imainatsuko.pdf

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.